

金剛山に青崩から2回登る

金剛山は大阪府と奈良県との境に聳える標高1125mの山。四季を通じて登山者の多い人気の山だが、大阪側からのロープウェイが運航停止になっており、登山者が減っていると聞いて12月初旬に2回登った。

息は上がるが、足が上がらない

一回目は千早赤阪村の青崩(あおげ)から青崩林道を詰めて、その終点地から川を渡り(以前ここに架かっていた橋は豪雨被害で流失したまま)急斜面の道を登って「青崩道」に合流するコースをとった。

だが、道は急登で荒れている。段差の大きい崩れかけた階段はなかなか骨が折れ、ふうふう言いながら登るが、足が重たくなってくる。やっとの思いで登山道に出、立ち止まって息を整えたが、脚の衰えをまたまた痛感。

山頂は結構の人で賑わっていた



↑シマカンギク 続きたい。ゆっくり、ゆっくり登ることにしよう。

センボンヤリの秋花

12月でもあり、花は少なかったが、まだシマカンギクやヤクシソウが咲き残っていた。

路傍で目についたのはセンボンヤリの秋花、長く伸ばした花茎の先端に槍の穂先のような蕾を付けている。実はこの蕾は開花することなく、内部で雄しべの花粉が雌しべに着いて、受粉が完了する閉鎖花なのだ。

閉鎖花(へいさか)——植物の巧みな戦略

花は、言うまでもなく、子孫を残すための生殖器官。子孫を残すために、花粉を運ぶ蝶や蜂を呼びこもうと鮮やかな花卉を広げたり、蜜を貯めたりと植物は大変な努力をしている。でも他者依存では心もとないのか、自前の雄しべと雌しべをくっつけて自家(花)受粉

センボンヤリの秋花⇒



登山道の傍らにツルリンドウの実

二回目は青崩道と呼ばれている登山コースを歩いた。登山口からしばらくは階段が続くが、比較的緩やかな道。休憩をとりながら進み、二時間半かかって山頂広場に到着。平日なのに、結構な数の登山者が行き交っていた。

いよいよ、ゆっくりハイキングに変えねば

昼食と休憩をとり、往路を引き返したが、往復共にコースタイムを上回った。最近筋肉痛も続いており、いよいよ「ゆっくりハイキング」に切り替えねばならなくなったようだ。

残る人生がどれほどあるのか分からないが、山歩きは





←センボンヤリの春花(写真は澤木仁さん) を確実に行うのが閉鎖花の仕組みなのだ。

でも自家(花)受粉はいわゆる近親交配、子孫繁栄にとってはリスクがある。そこでセンボンヤリは春先あの可愛らしい春花(解放花)を咲かせて他の花との交配をはかり、遺伝子の多様性をつくる努力もしているのだ。

植物の巧みな戦略に脱帽するばかりだ。

閉鎖花をつける植物たち

閉鎖花をつける植物は、センボンヤリの他に日本ではスミレ類、ホトケノザ、キッコウハグマ、フタリシズカ、ミヤマカタバミ、ツリフネソウ、ミゾソバ、タツナミソウ、ヒメハギなど 11 科 14 属 19 種が知られている。

続・続・二上山に咲く花々 19

ヤマガキ (山柿)

カキノキ科カキノキ属

写真は故・澤木仁さん

二上山山中の各所でカキが自生しています。また麓では山際の畑や土手にいろんな種類の柿が植えられています。

右の写真は故・澤木仁さんが、二上山中で撮ったものですが、果たしてヤマガキの花なのかどうか、不勉強の私には判別がつきません。

図鑑によると、ヤマガキ自体も元々日本在来種なのか不詳だとの事。



夏、山の中を歩いていたら、地面にカキの花が沢山落下しているのに出会います。

そして秋、山に残されている動物の糞には、柿の種がいっぱい交じっているのがあります。人里で食べてきたのか、ヤマガキが熟して落下したものを食したのか、いろいろと思いめぐらしながら、可愛いカキの花を思い出します。

奈良県は柿の名産地、五條市西吉野湯塩の小高い山の上に柿博物館(写真左)があります。展示されている柿の品種の多様さに驚かされますが、その駐車場から見る広大な柿畑のひろがり、殊に秋の稔りの光景は圧巻



です。